



杉山 彰

第1章 共生共存

- 1、夢を見る現実人間と、夢の中に存在させている仮想人間。
- 2、現実人間と仮想人間が、互いに与え続けている利益とは。
- 3、仮想人間が果たしてきた事実と、冒している事実。

1、夢を見る現実人間と、夢の中に存在させている仮想人間。

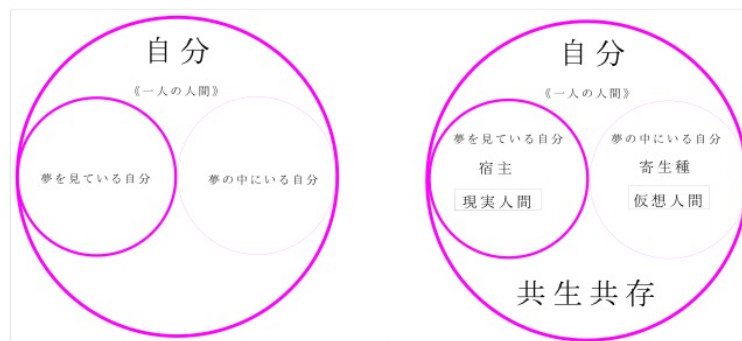
現実人間とは、夢を実現することを一つの与えられた役割として、この世の中に実在している人間である。仮想人間とは、夢を想い描くことを一つの与えられた役割として、現実人間の頭の中に虚在している人間である。当然のことであるが、この2者の関係は共生関係を前提として「互いに利益を受けながら、一緒に生活している」2者である。そしてさらに、どちらが宿主で、どちらが寄生種であるかという論議も明解である。現実人間が宿主で、仮想人間が寄生種である。

ちなみに、この場合、宿主を消滅させてしまうと、寄生種である仮想人間はどうなるのだろうか。あたりまえのことである。寄生種は宿主が消滅した瞬間に消滅してしまうのである。

では、寄生種である仮想人間を消滅させてみたらどうなるのだろうか。宿主である現実人間は、寄生種とは無関係に存在し続けるのである。但し、存在し続けるだけであって、生命の維持と種の継続という宿主の最も本質的な行為を黙々と営み続けるだけである。簡単に言えば、ただ生きるために食べ続け、ただ本能に従って生殖行為を行い続けるだけの人間となるのである。これはDNA遺伝子が、ただひたすら自らを複製し続ける利己的な生き方とよく似ているといえ

ば似ているのである。

<図2>



ちなみに、フリーマン・ダイソンは、彼の著書である<多様化世界>の中で、「生命を持つということと、複製するということは、事実上、同じ意味である」と述べている。

2、現実人間と仮想人間が、互いに与え続けている利益とは。

寄生種である仮想人間にとって、最大の【使命】は何か。それは宿主である現実人間を存在させ続けることである。その意味において、まさに宿主の命の存在と命の継続は、寄生種の【意志】そのものであるとも言える。従って、仮想人間が、現実人間に与え続ける利益とは、夢を思い描き続け、その描いた夢を、現実人間に〈利益〉として与え続け、《意識》させ続けることである。

一方、現実人間が、仮想人間に与えつづける〈利益〉とは何か。じつは目に見える形での〈利益〉といえるものは何もないのである。宿主が宿主として、ただ存在し続けていること自体が、寄生種にとっての最大の〈利益〉なのである。従って、宿主の絶対的な意志は、決して夢を実現することではなく、ただ存在し、種の継続を黙々と営為するだけなのである。宿主が夢を実現するように仕組むのは、つまり、宿主に夢の存在を《意識》させるのは、寄生種のもう一つの重要な【使命】であり、すなわち【意志】なのである。寄生種の【意志】とは、宿主の最も本質的な行為の対極に存在する、極めて利他的な生き方を《意識》として具現化させるものなのである。

<図3>



この関係も、自然界で行われているあたりまえの事実として、動物と植物の関係にあてはめてみると明解である。当然、この場合、宿主は植物であり、寄生種は動物である。根拠は、植物は動物より先に発生している。すべての動物が死に絶えても植物は何ら問題なく存在し続けることができる。本文で定義している宿主としての2つの条件をなんなくクリアしているのである。

では、植物が動物に与え続けている<利益>とは何か。この場合も、じつは前述した現実人間と仮想人間との場合と同じで、目に見える形では何もないのである。ただ存在し続けていることが、動物にとっては食べ物としての<炭水化物>がそこにあることであり、結果的に食糧が存在し、最大の<利益>を与え続けられていることになっているのである。一方、動物が植物に与え続ける<利益>とは何か。食べ続けることである。食べ続けることにより、花粉を受粉させることであり、種子を遠くまで運ぶことであり、糞を肥料として残すことである。この時点までは、植物と動物との共生関係は上手くいっていたのである。結果的に、寄生種の【意志】が、宿主である植物に生きる力を《意識》させて活性化させていたのである。

問題は、動物からやがて進化した人間の登場によって発生したのである。動物から進化した人間も初めは、宿主である植物の生きる力を活性化させていたのである。しかしある時、人間以前の動物たちが宿主に対して与え続けていた<利益>とは異なる利益を新たに発見し、創造したのである。炭水化物としての<利益>を、建築材や、道具や、燃料や、薬品などとして与えられる<利益>に、自ら相転移させたのである。当然のことであるが、この発見と創造を為させたものは、紛れもなく寄生種の【意志】であり、その寄生種の【意志】が目指したところは、宿主である植物のさらなる存在であり、繁栄であったことは間違いない。但し、寄生種が新たに手にした<利益>のあまりにも大きな結果が、一つの歯車を狂い始めさせる原因にもなったのである。そして、その原因によって、今日、人間が21世紀において描こうとしている夢の舞台である、地球そ

のものを無神経に蝕んでいく結果になろうとは、因果は巡るものである。ちなみに、地球は、地球上に存在するすべての有機化合物・無機化合物にとって、最大の宿主である。

3、仮想人間が果たしてきた事実と、冒している事実。

植物と動物との間の共生関係で起こった事柄は、仮想人間と現実人間の間でも起こる事柄なのである。いや、既に起こっている事柄なのである。仮想人間が現実人間に与え続ける夢は、当初は、現実人間が生きる力をみなぎらせ、活性化させる役割の枠を決して越えることはなかったのである。

なぜならば、正確にはまだその全容が解明されてはいないが、何らかのきっかけで動物から進化した人間は、当初は、目の前に果てしなく広がる大自然を前にして、人間としての無力さをただただ自覚し、ときには消え入るような謙虚さで宿主としての地球と対峙していたに違いない。また、あたりを徘徊する肉食獣たちに恐れをなし、運悪く肉食獣たちの餌食になってしまった仲間たちの惨事を、ただ身をすくませて見続けるしか手だてがなかったに違いない。この時点で、仮想人間としては、現実人間がたくましく生き続けて、何はともあれ命の灯火を消すことなく、その実体を存在させ、さらに継続し続けてくれなくては、寄生種の存在と継続は有り得ないのである。寄生種である仮想人間の【意志】は、とにかくにも現実人間に生き続けてもらうことであった。

まず、宿主である現実人間に与えた夢は、過去の記憶に基づく夢であった。それは一つには恐怖心であったに違いない。現実的に食肉獣に襲われた体験を恐ろしい夢として、宿主に与え続けることにより、生き残るための、例えばリスク管理としてのイロハを、まず学習させたに違いない。

そしてもう一つは、収穫期に枝もたわわに実った果実を、それこそお腹いっぱい食べたという事実と経験を、心がワクワクする楽しい夢として与えたに違いない。その果実が実っていた樹木の特長や、収穫したときの天体の動きや、気候の特長や、自然の変化や、場所の地形や、その樹木の回りに集まってくる大型獣の特長や分類などを、微に入り細に入り、それこそ写真にでも撮ったかのようにして、仮想人間の脳裏に刻みこませ、伝えるべき知恵として、残していく知識として《意識》させ、夢という形で与え続けたに違いない。定かではないが、この手法は、まさに宿主の《意識》に対して謀った、寄生種の【意志】による『飴と鞭』の手法かもしれない。

結果は、何10万年後の今日、現実人間も 仮想人間も、共にこの地球上で繁栄し、もはや、大自然を前にして消え入るような謙虚さで地球と対峙していた、かつての人間の面影はまったく無いといってもいい。それどころか、こともあろうに寄生種である人間が、宿主である地球に対して「この地球を守ろう」とか言った、主客転倒のスローガンを何の疑問もなく掲げているのである。宿主である地球にとって寄生種である人間たちが、たとえ植物という植物を消滅させようが、伐採し尽くそうが、オゾン層を破壊するフロンガスをふんだんにまき散らそうが、排水や廃油をいくら垂れ流そうが、さらには核兵器をいくら爆発させようが、プルトニウムをまき散らそうが、それらのすべては、ただ単に、地球という宿主を主に為している無機化合物としての形態を変化させることであり、宿主である地球そのものが存在し続けるという、極めて利己的な意志においては、それこそ痛くも痒くもないことである。

地球が、この太陽系に唯一存在する、青緑色に輝く生命の息吹が響きわたる惑星であり続けることは、宿主としての地球の意志ではないのである。それは寄生種としての人間の【意志】であり、寄生種としての本分である、生きる活力である夢を、宿主であるこの地球に与え続けるという、極めて利他的な【意志】を貫き通すことである。「この地球を守ろう」という寄生種の【意志】は、地球にとっては夢でも何でもなく、ただの空虚なかけ声なのである。